

## 論文審査の結果の要旨

氏名：郡 司 郁

博士の専攻分野の名称：博士（総合社会文化）

論文題目：シェイクスピア劇の女性たちにおけるキリスト教的描出の様相

審査委員：(主査) 教授 竹 野 一 雄

(副査) 教授 松 岡 直 美

教授 眞 邊 一 近

### 1. 本論文の目的

本論文は、シェイクスピアの劇作品の主要な材源と各作品への書き換えに注目し、材源と各作品との相違から読み取れる女性たちのキリスト教的描出の様相の有無を検証することで、各劇作品のキリスト教的ヴィジョンを探り当て、世俗的なシェイクスピアという根強い見解に抗して、シェイクスピアがキリスト教徒作家であることを論証することが目的である。

### 2. 本論文の構成

目次

序論 研究の目的と方法

第一章 シェイクスピアのキリスト教観

第二章 喜劇と問題劇におけるキリスト教

第三章 『ハムレット』の女性たちとキリスト教

第四章 『オセロー』の女性たちとキリスト教

第五章 『リア王』の女性たちとキリスト教

第六章 『マクベス』の女性たちとキリスト教

結論

引用文献一覧

### 3. 本論文の概要

序論では研究の動機、テーマ選定の理由、目的、研究の方法等、研究の意義について提示している。

第一章はシェイクスピアのキリスト教観について論じている。シェイクスピアが活躍した16世紀後半から17世紀にかけてのイギリス社会は、ヘンリー八世が行ったイングランド教会のローマ・カトリックからの分離にはじまり、メアリーの治世のカトリック体制への揺り戻し、その後再びエリザベス一世の治世でのイングランド教会体制へという変動により混乱した時代だった。その結果、国教はイングランド教会でありながらも国内には依然としてカトリック教徒も存在し、カトリック教徒に対する迫害の時代でもあった。シェイクスピアの時代はこのようなキリスト教の変動とカトリック迫害の時代だった。

シェイクスピア自身の信仰の記録は残されていないが、両親の実家はカトリックであり、特に父ジョンは彼の名前のある「信仰上の遺言書」の発見によって密かにカトリック教徒であったとされる。また、長女スザンナも国教忌避者名簿に名前が残っており、シェイクスピア一家はカトリック教徒であったろうと推測される。したがって、この当否の確定はできかねるとしても、イングランド教会体制下において、シェイクスピア自身は迫害を回避するためにイングランド教会に属しながらも、比較的カトリック信仰を取り入れやすい環境にあったということは言えるであろう。

第二章以降は、シェイクスピアのキリスト教に対する姿勢が各作品においてどのように描出されているか、また描出されているならばそれは具体的にカトリック的なかプロテスタント的なかを、女性たちの処女性や貞潔の問題と照らし合わせて分析している。その内容のあらまは以下の通りである。

第二章は喜劇『ヴェニスの商人』と『お気に召すまま』、問題劇『尺には尺を』の女性たちにおけるキリスト教的描出の分析である。『ヴェニスの商人』におけるポーシャとジェシカや『お気に召すまま』のロザリンドとシーリアはみな処女性が重視されたカトリック的な女性たちである。特にロザリンドとシーリア

のアーデンの森への追放の旅は、カトリック教徒の追放のアレゴリーと解釈される。その一方で、彼女たちは父親の意見に従わず自ら選択した結婚相手と結ばれ、夫と対等な関係を築こうとする。つまり、彼女たちは処女性を重視するカトリック的父権社会から脱却し、婚姻においては夫からも支配を受けないピューリタンの新しい理念の体現者でもある。また、ポーシャは処女性の重視という点でマリア的でありライケンの提示する5番目の要素（本研究の主要な方法論。本論文の第2の成果のところにて詳述）に該当し、ロザリンドは羊飼いの書き換えがイエスを連想させるとし、これも主に5番目に該当すると解している。

問題劇『尺には尺を』は四大悲劇の最初の作品『ハムレット』執筆の後に書かれている。『ハムレット』においてシェイクスピアは女性の純潔の問題を扱っているが、その後『尺には尺を』においてもイザベラを中心に女性の純潔の問題をさらに鋭く描いている。イザベラは修道女見習いという設定においてライケンの1番目の要素に該当している。彼女は信仰篤いカトリック教徒であるにも関わらず、マリアナとのベッドトリックを容認するが、これは自分の処女だけを守ろうとするイザベラの利己心の表れではなく、彼女はジュリエットやマリアナを通して「純潔な結婚」というピューリタンの理念をも容認している女性であると解釈できるとしている。

第三章は『ハムレット』の女性たちにおけるキリスト教的描出の分析である。ガートルードは早すぎる再婚を息子ハムレットに非難され、自己の罪の認識に至る。これはライケンの主に4番目の要素に該当すると解する。彼女は死によって、クローディアスのプロテスタントの世界からハムレットや前夫のカトリックの世界に回帰し、聖家族の姿を取り戻すのであり、それは同時に現夫クローディアスからの自立をも意味し、この点においてはピューリタンのである。オフィーリアについても同様であり、彼女の死は処女性を保持するという点ではライケンの主に5番目の要素に該当し、カトリック的であるが、恋人ハムレットからの自立と捉えるとプロテスタント的であると主張する。

第四章は『オセロー』の女性たちにおけるキリスト教的描出の分析である。デズデモーナもまた父に背き自由意志で結婚相手を選ぶという伝統的な父権社会の女性像に反しており、さらに父のいるカトリック国ヴェニスを離れ異国の地での結婚生活を選ぶという反カトリック的側面もある。その一方で、劇の後半では結婚当初に彼女が見せた夫に臆せず意見を述べる姿は消え、冷酷で理不尽な仕打ちをする夫に耐え忍ぶ伝統的で貞潔な妻であり、カトリックとプロテスタントの両方の要素が見え隠れしている。また、死の場面での彼女の蘇りはイエスを想起させ、ライケンの主に5番目の要素に該当し、キリスト教的犠牲と救済の象徴的姿をも見せる。エミリアについても同様であり、はじめこそ夫イアゴーに従属しているが、最後には毅然とした態度で夫の悪事を暴き、夫から自立する妻である。彼女はキリスト教の素地である枢要徳の勇気の体現者である。またビアンカは、カトリック社会においてダブル・スタンダードのもと容認されていた娼婦という負の側面を背負っている。この点においてカトリック的存在である。しかし一方で、彼女は他のどの女性よりも男性に依存せず自立した女性として描かれ、精神的な純潔は肉体的処女性に支配されないというピューリタンの理念を体現した人物でもあるとしている。

第五章は『リア王』の女性たちの分析である。ゴネリルとリーガンは甘言で父リアを騙し、創世記における蛇のようなキリスト教的視点からみて悪の存在である。また、エドモンドとの関係においても七つの大罪とされている高慢さや食欲さを露わにし、最期まで自分たちの罪を認識しない人物たちである。しかしそれは伝統的な父権社会の犠牲者として捉えることもできる。コーディアリアはデズデモーナ同様にイエスを想起させ、ライケンの主に5番目の要素に該当し、キリスト教の救済の象徴的存在である。また、ロザリンドとシーリアのアーデンの森への追放の旅がカトリック教徒の追放のアレゴリーであるように、彼女のフランスへの追放には迫害されたカトリック教徒の姿が投影されている。しかし、それは同時に父リアからの脱却であり、夫フランス王に戦争を懇願できるような対等な結婚生活のはじまりでもある。つまり、彼女もまたカトリック的人物でありながらもキリスト教の新しい理念が描出された人物であると言う。

第六章は『マクベス』の女性たちについての検証である。『マクベス』の前作『リア王』のゴネリルとリーガンの邪悪さは、マクベス夫人に継承されている。マクベス夫人は魔女の予言に触発され、夫を王殺害へとそそのかす悪女であるが、これはマクベス夫人に当時のカトリック教徒迫害としての魔女迫害が投影されていると考えられる。しかし、マクベス夫人はマクダフ母子の惨殺を聞いて罪の意識に目覚めることから、ライケンの主に4番目の要素に該当している。彼女は元来悪女なのではなく、本来は意見を述べる夫の良き協力者だったのだということが示唆されており、彼女もまたピューリタンの妻の一面を垣間見せている。マクダフ夫人は、マクベス夫人が罪を認識するきっかけとなっている点でライケンの主に5番目

に該当し、またマクダフがマクベスを倒す正義の原動力になっている。

以上のように、シェイクスピア作品を丹念に読み解いてみると、喜劇や問題劇の女性たちは結婚で幕を閉じ、悲劇の女性たちは死で幕を閉じるという点では異なっているが、どの作品においても女性たちにはカトリック的側面とプロテスタント的側面、特にピューリタンの側面の両方が描出され、交錯していることが見て取れる、と主張する。

したがって、材源からの書き換えとライケンのキリスト教的要素との照合から、シェイクスピアは劇作品に意識的にキリスト教的ヴィジョンを取り込み、劇中の女性たちの処女性や貞潔の問題を通してカトリックの枠組みで劇を構成しながらもプロテスタント的要素も絶妙なバランスで取り入れたと結論づけることができる、としている。イングランド教会体制を維持することによってカトリック教徒の反乱や迫害が繰り返された混乱した時代背景において、シェイクスピアは臆することなく宗派にとらわれない柔軟な信条と思考で劇作品を創作したのである。

#### 4. 本論文の問題点

- ①本論文は、キリスト教徒作家シェイクスピアを前景化することに重点があるためか、シェイクスピアをキリスト教徒作家とは見なさない見解についての記述が簡略すぎる。キリスト教徒作家シェイクスピアを論じるにあたっては世俗的なシェイクスピアについて十分に述べる必要がある。
- ②郡司氏は四大悲劇の男性登場人物への目配りもしたうえで女性登場人物の悲劇を検証しているが、なぜ女性の登場人物に焦点を当てた検証なのか説明がやや不足している。
- ③不必要な反復記述が目立つ。
- ④シェイクスピア悲劇とキリスト教悲劇についての対比考察を加味すべきではなかったか。
- ⑤シェイクスピア劇にみられる宗教的概念を持つ言語の意味内容の確認をおこなうべきであろう。

#### 5. 本論文の意義と成果

国の内外を問わず、シェイクスピア劇に関する研究は多岐にわたっているが、それにもかかわらず、シェイクスピア劇作品とキリスト教との関係を真正面から取り組んだ研究は限られている。

国外においては、たとえば、ウィルソン・ナイトがシェイクスピア劇の神学的構成を指摘したり、ジュリエット・デュシンベリーがピューリタンの側面を指摘したりしてきたが、シェイクスピア研究史において、A. C. ブラッドリーを持ち出すまでもなく、シェイクスピアはルネサンス期を代表する世俗的な作家として今だに扱われてきていると言ってさしつかえないであろう。

ちなみに、2015年1月現在、我が国においては41のシェイクスピア関連の博士論文題目が公開され、シェイクスピアと聖書との関係ならびに材源からの書き換えを一部含む博士論文はそれぞれ一つずつ見られるが、本論文のテーマでの本格的な博士論文は未だ現れていない。そのような現況に鑑みて、本論文はシェイクスピアについて今日なおも多くの人々に抱かれている世俗的なシェイクスピアという神話を覆そうとする果敢な研究である。それゆえ、本論文によりこれまでと異なるキリスト教徒作家シェイクスピアが首尾良く立ち現れるならば、シェイクスピア研究者や愛読者だけでなく一般読者にとっても意義ある研究と見なされることになるであろう。

第1の成果は、郡司氏がシェイクスピア劇7作品（喜劇：『ヴェニスの商人』、『お気に召すまま』／問題劇：『尺には尺を』／四大悲劇：『ハムレット』、『オセロー』、『リア王』、『マクベス』）とそれぞれの主たる材源との異同を綿密に分析し、元来はキリスト教色のなかった材源がシェイクスピアによって書き換えられて、男性主要人物たちはもとより、とくに女性登場人物たちとの関係において各劇作品世界にキリスト教的要素がどのような仕方で入り込んでいるかを解明したことである。この成果はキリスト教と四大悲劇の関係のさらなる探究を行う上で貴重な基礎資料になるのみならず、喜劇や問題劇におけるキリスト教との関係の研究の糸口にもなっていると言えるであろう。ただ、この成果は本研究において考察対象とした劇作品に限定して言えることであって、本論において行ったシェイクスピア劇7作品の検証結果が他のシェイクスピア劇作品にも当てはまるかどうかの検証は今後の課題である。

第2の成果はライケンの方法論の導入とその汎用性の間接的提示である。郡司氏は、材源から書き換え

られた箇所にもみられる女性たちのキリスト教的描出の有無の判断基準として、著名なミルトン学者でキリスト教と文学の関係論について造詣の深いリーランド・ライケンが“Shakespeare as a Christian Writer”で提示した方法論——キリスト教的であると解釈する場合の5つの要素——を用いている。それらは、(1)聖書、『祈祷書』のようなキリスト教文書、教会生活への明らかな言及、(2)劇に見られる概念とキリスト教教義との一致、(3)劇で具現化されている現実の見方と聖書の現実の見方との一致、(4)劇に見られるキリスト教的経験の描写、(5)キリスト教的な諸原型やシンボルの存在である。さらに、郡司氏は(6)として、枢要徳（賢慮、節制、剛毅、正義）のみならず、陰画的にキリスト教的ヴィジョンを提示する悪徳（七大罪：傲慢、妬み、情欲、貪欲、貪食、憤怒、怠惰）の要素を追加設定し、シェイクスピア劇7作品におけるキリスト教的ヴィジョンの検証を行っているが、郡司氏はライケンの方法論の実践を通して、この方法論がシェイクスピア劇のキリスト教的ヴィジョンの判別に役立つだけでなく、他の文学作品とキリスト教との関係を検証する方法論として汎用性を有していることをも間接的に示し得ていることである。ただし、本論の始めに、ライケンの方法論ならびに枢要徳と七大罪の追加設定の妥当性の根拠をもっと明確に述べておかなければならないと言わざるを得ない。

第3の成果としてあげるべきはシェイクスピアのキリスト教理解にかかわる指摘である。郡司氏はシェイクスピア劇7作品を綿密に検証した結果、シェイクスピアはテキスト次元においてカトリック的傾向とプロテスタント急進派であるピューリタンの傾向が見てとれるとした。つまり、郡司氏は、ピーター・ミルワードのようにシェイクスピアを隠れカトリックと断定し、言わばカトリック一色に塗りつぶす見解にも、ジュリエット・デュシンベリーのようにシェイクスピアをピューリタンの傾向であると突出させた見解にも全面的に同意することはせず、シェイクスピア劇作品にはカトリック、イングランド教会、ピューリタンの要素が盛り込まれており、それこそがシェイクスピアのキリスト教信仰の表れであると主張するのである。したがって、シェイクスピアは、イングランド教会体制下において、みずからの劇作品をとおして、期せずして、教会一致主義の先鞭をつけたキリスト教徒作家であると言っても不当ではないであろう。

以上、本論文はいくつか問題点も見受けられるが、世俗的なシェイクスピアという神話を限定的ながら払拭し得た労作であり、シェイクスピア劇作品の読み方として新たな境地を切り開くものである。

よって本論文は、博士（総合社会文化）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成27年1月29日